

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2173300043		
法人名	有限会社 しましまハウス		
事業所名	しましまハウス宮川		
所在地	飛騨市宮川町巣之内63		
自己評価作成日	令和3年9月2日	評価結果市町村受理日	令和3年11月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kairokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhvu_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2173300043-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kairokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhvu_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2173300043-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和3年9月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>山紫水明、山が近くに迫り近くを川が流れるという環境に恵まれ、当施設の理念・生まれ育った地域の思い出や生い立ちを考慮し、残された能力を最大限発揮できるよう、スタッフー同心を込めて支援している。認知機能の低下を防ぐため、毎日の体操や学習療法、畑等の屋外作業等様々な工夫を行っている。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>過疎化が進む地域ではあるが、ホームをひとつの家族と捉え、職員は、利用者一人ひとりの人生経験や残存能力について把握している。また、野菜作りや漬物づくり等は利用者から学んでいる。利用者は、一人ひとりが役割を持ち、それをこなしながら、日々、穏やかに暮らしている。協力医の訪問が難しくなり、家族同行での受診を原則としているが、現在は事業所対応が多くなりつつある。今後は、地域全体で医療の充実を図る事が必須と思われる。職員一人ひとりが得意な事を活かしながら、体操、本読み、学習療法、畑仕事等を利用者と共に行い、認知機能の低下防止だけでなく、自信と生きがいに繋げている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23,24,25)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目: 9,10,19)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18,38)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2,20)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目: 36,37)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目: 11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目: 30,31)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目: 28)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者一人ひとりの生れ育った地域の思い出や生い立ちを考慮し、残された能力を最大限活かせるよう管理者・スタッフ一同、理念の実践に努めている。	理念を目に付き易い場所に掲示している。職員は、利用者が住み慣れた地域で、個々に役割りを持って暮らせるよう残存機能を見極め、引き出しながら支援に努めている。利用者の笑い声が絶えないホームを目指し、理念の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	過疎化が進み以前ほどの交流は少ないが、限られた状況の中で地域交流に努めている。	地元の老人会や振興会の人や、敷地内の草刈りや庭の手入れを担ってくれている。防災対策についても、定期的に地域と話し合い、公民館活動などにも参加している。ホームの前がゲートボール場になっており、利用者も観戦しながら交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍という状況もあり、地域の人々との交流も限定的になっているが、利用者家族等を通じて地域の人々への発信に努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催はここ二年程途絶えているが、文書をもって情報発信し、意見の汲み取りにも努めている。	新型コロナウイルス感染症予防対策として、運営推進会議は、書面会議とし、議事録を関係機関、家族に送付している。報告文書について、関係者から助言や指導を得ている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	法律の改定・制度の変更等を含めて、特にメール等を通じて連携を密にし、日常の介護に支障の無いように努めている。	行政からは、感染症対策や地元の取り組みなど、最新情報や具体的な指導等を得ている。飛騨市独自の健康診断や車の補助等についても、細やかな支援を受けるなど、良好な協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	設立当初から身体拘束の意義の理解に努め、身体拘束「ゼロ」を目指している。特に最近ではスピーチロック無しの介護に努めている。	利用者の身体機能維持と共に、心のケアを大切に支援を継続しており、現在、拘束が必要な利用者はいない。身体拘束についての適正化委員会は定期的に開催し、虐待についても、研修で学んでいる。職員間で互いに注意喚起をしながら防止に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待も身体拘束の一部であるという認識の本、防止の徹底に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	中々制度として周知徹底されていないのが現状だが、出来る限り機会を設けて制度の必要性と活用を計っていくよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の際に利用者や家族の不安や疑問点を確認し、その解消に十分な説明を行うように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族等の意見・考えが表出できる機会を設け、それが施設運営に反映されるよう努めている。	定期的にする同法人の合同通信と共に、毎月、担当職員が利用者の様子を書いたメッセージや、本人直筆の手紙等を家族に送付している。利用者は、日々の「勉強時間」の中で、文字を書く事に懸命に取り組んでおり、利用者本人の家族宛ての手紙は、家族にとって一番の宝物となっている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	同時に職員の意見や提案等も表出できる場や機会を設け、運営に反映できるよう努めている。	管理者と職員が風通しの良い関係にある。コロナ禍でも、利用者が何か喜びを感じられるような支援ができないかを話し合い、職員が移動販売車の利用を提案している。それを実現に繋げ、利用者が買い物かごを持って、定期的に楽しめる支援となった。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員一人ひとりがやりがいを持って働けるよう、代表者は職場環境・条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者や職員一人ひとりの資質向上に向けて、代表者はあらゆる機会の確保に努め、研修を受けられるよう進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	一部、ネットワーク作りや勉強会は進めているが、総括的な取り組みにはなっていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新しい環境に移る際はいかなる人でも不安を抱く、そういった不安を極力減らすよう、本人との関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	同じように家族との関係にも細かい配慮を行い、安心して生活できるよう関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	初期段階のサービス提供が本人と家族等にとって最も大切であるという認識の本、その対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と本人は「介護する一される」といった縦の関係ではなく、一緒に過ごし喜怒哀楽を共にするという共生の関係を築いていくよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、家族も本人の生活を共に支援していくという対等の立場であるという認識の本、一歩的な介護に陥らないよう協力関係を築いていくよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人がこれまで培ってきた人間関係や社会との関係を把握し、その関係が断ち切れなような支援に努めている。	過疎化が進み、訪問者は少ない。利用者にとっては、地元の職員が馴染みであり、地域の行事や近隣の事を話しながら、利用者の記憶を呼び起せるよう工夫している。本人が家族に電話をかけた時、手紙を書くことを支援するなど、関係継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日常生活の中で、利用者一人ひとりの関係を把握し、利用者が孤立しないよう、共に支え合って生活できるよう支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了してもこれまでの関係性を大切にし、環境や生活の継続性を尊重して移り先の関係者に情報提供するよう努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者がその人らしく暮らしていけるよう、利用者一人ひとりの思い・希望・意向の把握に努めている。また、職員全員が共有できるよう努めている。	個別ケアを重点に支援し、それぞれの利用者との時間をかけて関わりながら、思いや希望を聞いている。全員で行う必要がある支援や取り組みは、参加しやすい雰囲気作りに努めている。また、利用者が興味のある新聞記事についても把握するよう心がけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人が安心して自分の有する力を発揮し、自分らしく生活できるようプライバシーに配慮し、家族と協力しながら支援できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の部分的な問題や断片的な情報把握だけに陥らず、本人の総合的な能力や力量の把握に努め、有する力を見落とさないように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	アセスメントとモニタリングをを繰り返しながら、本人がより良く暮らすための課題やケアのあり方について、家族を含めた多くの関係者と話し合い臨機応変に対応できるよう努めている。	介護計画は、家族の意見や利用者の希望を把握し、関係者が十分に話し合い、介護記録を参考にして作成している。また、利用者本位の支援となるようアセスメントとモニタリングを行い、現状に即した計画となるよう見直しも行っている。	コロナ禍の今は、難しい状況であるが、収束後には、家族と日程調整を行い、家族参加のサービス担当者会議開催が望ましい。家族が、利用者の状態や生活状況などを見ながら、意見交換が出来ることに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の介護の中で身近で支える職員しか知りえない事実や、その気づきを具体的に記し、その情報の共有化に努めてより良いケアに繋がるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者のニーズに対して柔軟に臨機応変に対応できるよう、多様な支援の方法が備えられるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターはもちろんの事、多様な地域資源(民生委員、ボランティア、病院、警察、消防署等)を活用し、安全で安心した生活ができるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人と家族の同意を得て協力医療機関への受診を行っているが、状況に応じて本人や家族が希望する医療機関への受診もできるよう努めている。	契約時に、かかりつけ医について説明し、受診は原則家族が同行することも説明している。現在は、協力医の往診が中止となり、家族の受診同行が難しい場合、事業所が対応している。また、状況に応じて、病院で家族と待ち合わせるなど工夫している。	過疎化が進んでいる事で、医療機関との連携も多少不安感が否めない状況である。今後、運営推進会議で行政と現在の状況を話し合い、利用者が適切な医療を受けられる支援の実践に期待したい。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	高齢者は状態が急変しやすいという認識の本、日々のケアの中で少しの変化や異常に気づきやすい介護者は適切な受診ができるよう看護職との協力を努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院は本人にとって心身に大きなダメージを与えるという認識の本、本人のストレスや負担を軽減するために医療機関に対して情報提供、話し合いを行うよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期の在り方について、入所の段階で本人や家族とよく話し合い、その対処の仕方について理解を得るよう努めている。看取り対応は行っていない事についての説明はしている。	契約時に、重度化や終末期の対応について説明し、本人・家族の同意を得ている。看取り対応を行わないことも説明している。要介護3になれば、特養への入所申し込みを申請し、事業所での生活が可能であれば、継続して支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	高齢者は状態が急変しやすく転倒等の事故も発生しやすい事を認識し、応急手当や初期対応が素早くできるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	最近の災害の多発化に備え、避難訓練を始め様々な対応ができるよう職員の教育に努めると共に、公共機関等の情報の共有化に努めている。	災害避難訓練を定期的に行い、様々な災害を想定しマニュアルや誘導方法を検討する机上訓練も実施している。備蓄を完備し、定期点検も行っている。コロナ禍で近隣との協力関係が不十分であるが、今後は、地震及び地震や大雨がもたらす土砂災害についても、地域と協力体制作りを検討している。	災害対策について話し合い、ハザードマップの確認、見直しについて検討している。コロナ禍の今、地域と共に話し合う事は難しいが、様々な災害への対応を強化する為、職員の学べる機会とし、今後の対策に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの尊厳を尊重とプライバシーの確保を徹底し、利用者の権利を守る事を必須の事項と捉え、日々の介護に努めている。	職員は、利用者が地域で貢献した人であることを忘れず、常に敬い、一人ひとりの思いや意向を受け止めている。また、無意識に不適切な対応を行っていないかを職員間で注意喚起し、気づいた事は、すぐに話し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の発声する言葉はもちろん、表情や全身での反応を注意深くキャッチし本人の希望や好みの把握に努め、本人が自己決定できる状況を作り出している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりが本来持っている生活のペースやリズムを大切にし、その動きや状態に合わせた適切な関わり方を模索し、楽しく柔軟に生活できるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみやおしゃれは、心地よさ・落ち着き・明るさ、何よりも自分としての意義をもち、状態の安定にも繋がるため、個々に合わせた支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昼・夕食は外部委託の業者の食材を利用し、調理は利用者と職員と一緒に工夫している。朝食は地元の食材や施設で作られた物を利用し、食事が楽しみになるように工夫している。	食材は配食サービスを利用しながら、ホームで育てた野菜や職員の差し入れも使い、職員が調理している。また、地産地消を大切にしながら、地域とのつながりも大事にしている。利用者と共に、楽しみながら保存食作りも行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	業者依頼の面もあるが、カロリーの過不足、栄養の偏り水分不足が起こらないよう、職員全員が知恵を絞り様々な工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアの能力は利用者それぞれであるが、本人の力を引き出しながら、本人に合った口腔内の清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	可能な限りトイレで排泄する・気持ち良く排泄するを基本モットーとし、排泄の失敗やオムツの使用を減らすよう支援している。	ほとんどの利用者が布パンツである。職員の目配りで、声掛けをする場合もあるが、トイレでの排泄が習慣となっている人が多く、声かけなしで、自発的にトイレに行ける人もあり、見守り支援をしている。夜間、不安な場合はポータブルを利用する人もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	高齢者は便秘になりやすく、その原因や及ぼす影響を考慮し、水分補給、運動の必要性、あるいは食事の内容等に工夫を凝らしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の際は一人ひとりの資質を大切に、決して無理強いすることなく、くつろいだ気分で入浴できるよう柔軟な対応をしている。	週2回の入浴は利用者の楽しみでもあり、職員が介助しながら、安全な入浴を支援したり、ゆっくりと個浴を楽しむ人もある。入浴日ではない時は、足浴で支援するなど、利用者の希望を聞きながら、柔軟に対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一日の流れの中で本人が自然な形でリズムのある生活ができるよう、本人の生活習慣や活動状況を考慮しながら、休息や睡眠がとれるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は、利用者一人ひとりの服用する薬の目的や副作用・用法・用量について理解し、服薬による状態の変化・経過を記録し、医療機関に情報提供している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりのできる力を最大限活かし、自分らしく楽しく張り合いのある生活ができるよう、役割分担を行い支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の中、一人ひとりの希望に添う外出支援はできないが、施設近辺の散策や販売車を利用した買い物支援を行っている。	近隣の喫茶店や道の駅などへ出かける外出支援を行っていたが、現在は感染予防の為、自粛している。外出は周辺の散策程度に留めていたが、職員の提案から、毎月、ホームに移動販売車受け入れを行い、利用者が自分で買い物を楽しめるよう支援している。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在外出する機会が持てない中、JAの移動販売車を活用し、月に2回程度買い物を行い金銭の所持や使うことの楽しさを感じてもらえるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	一人ひとりがそれぞれ有する力に応じて年賀状や暑中見舞いを書いたり、電話をかけたりして対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者一人ひとりが今まで慣れ親しんできた自宅の延長として、出来るだけ自分の力でその人らしく快適に、また、感覚や価値観を大切にしながら過ごせるよう工夫している。	玄関を入れれば、すぐに共用空間となっており、利用者が訪問者の姿を確認することができ、皆で挨拶を交わしている。利用者の役割り表を掲示し、季節の花も各所に飾っている。畳スペースには猫のハウスが置かれ、穏やかで温かい家庭的な雰囲気の中で、利用者が思い思いに過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	9人という少人数での共同生活であるが、集団生活では気持ちが落ち着かず不安やストレスの原因となる方もあるため、一人で過ごす時間を確保し落ち着ける場を作るよう対応している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	今まで使い慣れた物や馴染みの物を居室に配置し、プライバシーを大切にしながらその人らしく落ち着いた生活ができるよう工夫し支援している。	居室は2階にもあり、エレベーターがあるが、リハビリを兼ねて階段を利用する人もある。使い慣れた家具や日用品を置き、思い出の写真や季節の花が飾られている。毎朝、職員と一緒に掃除をして、気持ちよく過ごせる居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの身体機能や認知機能に合わせて本人が普通に安心して暮らせるよう、危険防止の設備や器具を配置し、不安や混乱を招く事のない環境整備に努めている。		